



# シミに対するレーザー治療

コメンテーター 宮田成章 先生

みやた形成外科・皮ふクリニック院長

**最**近は美容医療に対するニーズが急速に高まり、シミを治したいと外来を訪れる患者さんも増えている。しかし実際の「シミ」にはさまざまな病変が含まれ治療法も異なることから、鑑別が非常に重要になる。慎重な鑑別をもとに、どのような治療を行っていくべきか、治療の手順や注意点、機器の選び方やその活かし方など、レーザー治療のエキスパートである宮田成章先生にお話をうかがった。

## 診断では客観的な評価と問診が重要

—患者さんの高齢化が進んでいるためか、現在「シミ」に対しての注目が高まっているように思います。患者さんが訴えるシミにはどのような疾患が含まれるのか、教えてください。

**宮田** 患者さんが訴えるシミには多様なものが含まれます。老人性色素斑のみではなく、脂漏性角化症、雀卵斑、後天性真皮メラノサイトーシス(acquired dermal melanocytosis : ADM)、炎症後色素沈着、肝斑などです。母斑症、たとえばカフェオレスポットとも言われる扁平母斑のようなあざもシミだと表現する患者さんもいます。さらに、赤みやくすみ、あるいはたるみもシミだと訴える方がいます。ゴルゴ線と言われる部位は、照明の角度

によって影になるとシミのようにみえますが、引っ張ると消えることもあります。

—では、患者さんが訴えるシミを正しく診断することが非常に大切ですね。宮田先生が正しい診断を行ううえで、重要と考えるポイントを教えてください。

**宮田** 最も怖いのは悪性を見逃すことです。肉眼ではわからないことも多く、良性に見えるものがそうではないこともあります。そのため、必ず拡大鏡のダーモスコープ等を用いてシミの状態をしっかり見ることを鉄則としています。拡大した所見を患者さんに見せて説明すると、納得もしていただけますので、しっかりとインフォームド・コンセントを行うためにも非常に大切なことだと考えています。

さらに、特殊な皮膚分析器アンテラ 3D™は赤みや茶色みが客観的に

判定できますので、シミのように見えていても、医学的には赤みであり、問題ないということを説明する際にも役立ちます。

もちろん問診も非常に大切です。幼少期からあるシミは扁平母斑の可能性が高いですし、20歳代で生じたシミはADMを疑うこともあります。患者さんは若い頃は仕方がないと思っていたけれども、40歳、50歳になって突然気になって来院されることがあるので、発症してすぐに来院するとは限りません。ですから、問診でいつからシミがあるかを確認することは重要です。

診察にあたっては、先天性、悪性の可能性や、本当にメラニンに関連しているかの確認、加えてメラニンの深さまでをすべて考えなければいけません。

—シミの診断で誤診しやすい疾患はありますか。

**宮田** 案外間違うのが、ほくろ(色素